

いわゆる畿内系二重口縁壺の展開

野々口陽子

1. はじめに

古墳出現期に特徴的な供献土器である二重口縁壺は、土器供献祭祀の主体をなす器種であるとともに、円筒埴輪受容以前の出現期古墳の編年研究の指標となる資料でもある。古墳編年の基軸としての供献土器の研究は、各地で精力的に進められているが、こと二重口縁壺に関しては、多様な属性を有するがために、型式学的検討が不十分なままに、編年的研究に援用される傾向がある。

二重口縁壺は弥生後期後半に「畿内」^(注1)において出現し、以後布留式の新段階に至るまで実に様々な形態のものがみられる。河内、大和周辺部において分布する一部の型式のものについて、慣用的に畿内系二重口縁壺と呼称されているが、庄内式併行期の人的移動を伴う大規模な地域間交流を背景として、その型式には他地域の土器形態および製作手法が大きく影響しており、系統的整理が不可欠のものとなっている。

本稿では、地域間交流を背景とした形態および手法の系統的理解を前提として、畿内系二重口縁壺の基本的な型式とその変遷について検討を加える。さらに布留0式甕あるいは甕Cなどとともに、古墳出現期に特に拡散性の高い畿内系二重口縁壺として知られるいわゆる茶白山型式が、複数の型式に分類できることを明らかにし、その系譜について考察することにしたい。

2. 研究史抄

従来、茶白山型式と呼ばれてきた畿内系二重口縁壺は、1966年の奈良県桜井茶白山古墳の発掘を契機として一型式として認識されるようになった^(注2)。その際、最も注目されたのは「焼成前に穿孔された儀器としての位置づけ」であったが、森浩一氏は、茶白山型式の成立に関して「先行するものが、岡山県弥生後期の酒津式にみられる」とされ、型式学的検討の端緒をきった^(注3)。その後、寺沢薫氏は、『矢部遺跡』において、二重口縁壺の属性のうち編年的に援用しうる要素を明らかにし、無飾二重口縁壺の中での超大形二重口縁壺の出現を重視し、これを茶白山形二重口縁壺として型式組列を提示している^(注4)。

茶白山型式に代表される畿内系二重口縁壺の型式とその編年の位置付けについて具体的に検討を加えたものとしては、主に北部九州出土の二重口縁壺について詳述した蒲原宏行の論攷がある^(注5)。多様な属性を有し、かつ墳墓から単体で出土する傾向が強いため敬遠されがちであった二重口縁壺の編年の位置付けを意図しているところは評価されるべきであろう。蒲原氏は、畿内のなかでも大和や河内などの地域により、胴部の形態変遷に地域差がある可能性を指摘しており、庄内式新相において下膨れ気味の胴部を有する壺が北部九州において盛行する背景には河内地域の影響があるものとしている^(注6)。

一方、関東地域の二重口縁壺の研究には、大枠での地域性に着目し、系譜的検討を行ったものみられる。田口一郎氏は、元島名将軍塚古墳の調査に端を発して、上野地域の二重口縁壺の型式変遷を試み、その出自を伊勢湾地域に求め、人的移動を背景とした「伊勢型二重口縁壺」の拡散を考察している^(注7)。また二重口縁壺の型式分類の基本的視点を提示した利根川章彦氏も、関東地方の二重口縁壺が基本的に東海西部系を主体としたものであることを明らかにしている^(注8)。利根川氏は畿内系二重口縁壺の基本的な分類要素を的確に指摘しており、寺沢氏が『矢部遺跡』で明らかにした茶白山形二重口縁壺の型式変遷をさらに発展させたものとして評価できるが、各型式の系統的な整理が不十分であり、出現の時期や存続期間についても誤認がみられる。畿内地域と東海以东の東国地域の二重口縁壺の型式を地域ごとに詳細に検討した比田井克人氏は、その型式変遷を明らかにした上で、東国地域の二重口縁壺は、畿内系と伊勢湾系といった二系統の系譜に分かれるとする結論を導き出している^(注9)。比田井氏の研究は、地域性を重視した上で、型式変遷を概観し、併行関係を明らかにすることを意図した意欲的な研究である。しかしながら、畿内系二重口縁壺の典型的な型式として提示されたB類の細分案は、二次口縁の接手法の基本的な相違を看過しており、型式設定に問題がある。

新たな形態や手法の導入を伴う土器型式の変遷の背景には、地域間交流を伴う社会的状況の変化があり、土器型式の変遷は単に編年の考察のみをめざしたものとなるべきではない。本稿で対象とする二重口縁壺が、最も多様な展開をとげるのは、社会的変動期にあたる古墳出現期であり、甕形土器と同様に、その型式には他地域の土器の形態や製作手法の影響がみられる。型式学的検討は、製作手法の相違やその地域的影響が考察されることによって、新出型式の意義づけや社会的関連性に言及することができる。その意味で、型式分類に際して、各属性の地域的影響を検討することは不可欠の作業であろう。

古墳出現期の土器形態および製作手法の著しい変化は、これが様式的転換であった以上、二重口縁壺もまた例外ではない。甕形土器が庄内甕から布留甕へと変化するのとはほぼ動きを同じくして、二重口縁壺にも様式的変化に呼応する大きな型式変化が認められるが、こ

の点については従来、明確に指摘されておらず、地域的影響についても言及されていない。本稿では、まず弥生後期後半における初期の畿内系二重口縁壺の形態を明らかにしたうえで、古墳出現期における畿内系二重口縁壺の基本的な型式と変遷を再検討し、各型式や製作手法の系譜および背景にある地域間交流について検討を加える。

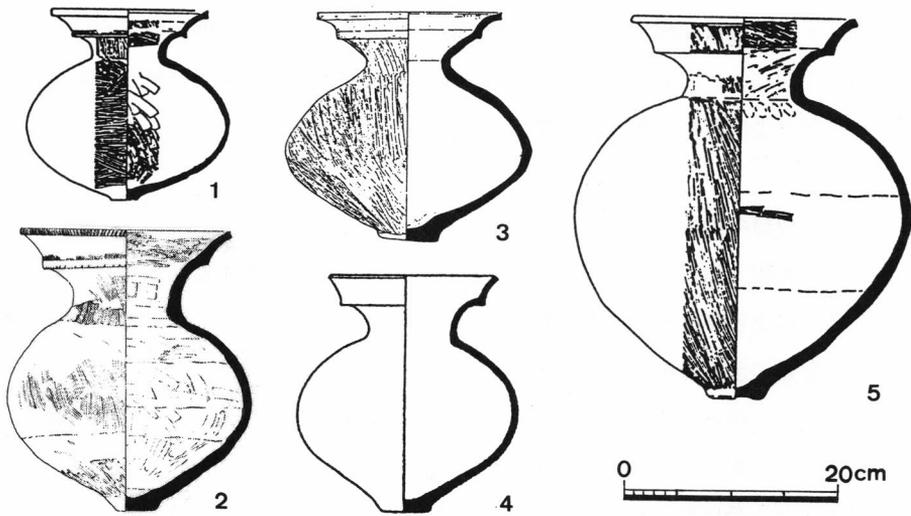
3. 二重口縁壺の出現

近畿地方の弥生土器様式に於ける二重口縁壺の出現は、手焙形土器の出現と共に、畿内第V様式後半の土器群を規定する重要な指標の一つとされてきた。ここでは古式土師器の二重口縁壺分類の前提作業として、まず弥生後期の資料を検討しておきたい。

従来、いわゆる畿内系二重口縁壺と称されてきた壺形土器には、短く外反する頸部にさらに外反気味の二次口縁を形成するタイプ(以下A類)と、茶白山式壺として注目にされた直立気味の頸部に受け部となる一次口縁を作り出し、さらに大きく外反する二次口縁を形成するタイプ(以下B類)の二つがある。両者は系譜的には異なるものとされており、前者のA類が弥生後期後半に出現し、B類は庄内式最古段階に出現する。そして庄内式新段階にA類はほぼ終息し、以後はB類が主体的型式となる。壺Aは、形態上畿内第V様式に存在する外反する短い口縁を有する広口壺を祖型として発達したものと考えられているが、B類の出自についてはこれまでのところ明らかにされていない。

まず、A類は、その典型的なものとして、唐古・鍵遺跡第45号堅穴下層資料の二重口縁壺をあげることができる。^(注10)この壺の特徴は、頸部が緩やかに外反し、斜め上方へ大きく拡張する二次口縁を有する。体部は分割成形技法により特有の張りを持ち、小さく突出した底部を形成、外面調整に丁寧なヘラミガキを施しており、A類二重口縁壺の初期のものといえる(第1図4)。

この壺の出土した第45号堅穴資料の帰属時期については、かつてその上層と下層との様相の違いが畿内第V様式後葉の細別を行う際の基準資料となると考えられてきた。この資料を再検討した豊岡卓氏^(注11)は、弥生時代の土坑の分類を試みた藤田三郎氏の研究に注目し、奈良県四分遺跡SE760一括資料では、土坑祭祀として広口壺を中心とする壺類がまず最初に投棄され、その後、他の器種の投棄が行われたとする藤田氏の指摘を受け、第45号堅穴資料についても上層と下層の土器様相の相違は、土坑祭祀における投棄の順序が反映しているとしている。つまり、上層と下層の資料は、^(注12)短期間に相次いで投棄されたものであり、層位的に分離し別型式とする根拠はなく、第V様式後葉における一時期の所産であるとした。豊岡氏の見解は以後の新たな資料の蓄積によっても追認されるようになり、初期のA類二重口縁壺を含む第45号堅穴の資料は一括して第V様式を二分する場合の後半の土



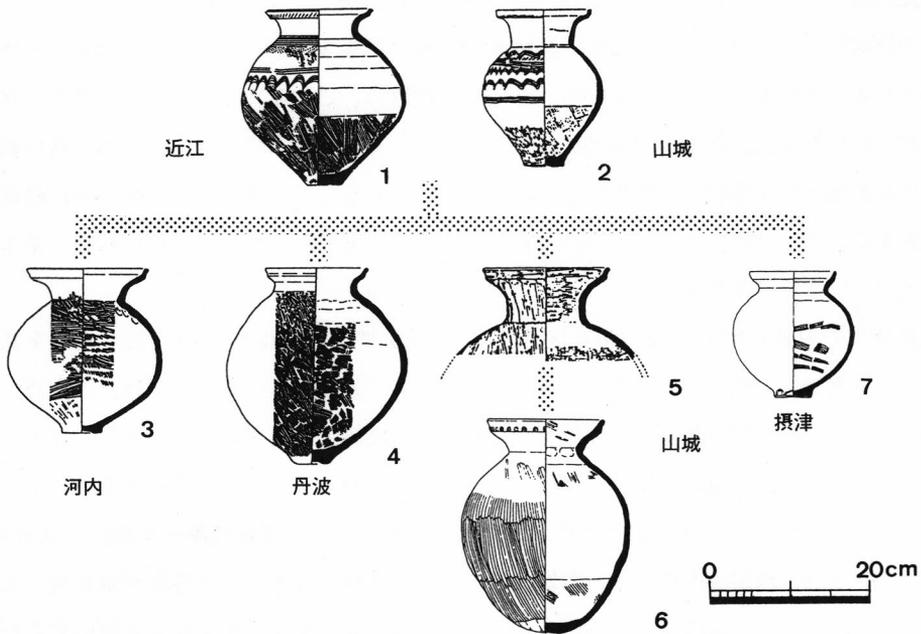
第1図 A類二重口縁壺(注各文献から引用)

1. 亀井・城山遺跡NR-3001 2. 久宝寺南(その2)遺跡SD-51 3. 亀井遺跡南側側溝
4. 唐古・鍵遺跡第45号竪穴下層 5. 田能遺跡6Y調査区第2溝

器群と考えられている。

広口壺を祖型とするみられるA類壺の類例をあげると、河内、大和、摂津などの地域に分布がみられる。これらは第V様式後半の資料がほとんどであり、八尾市亀井・城山遺跡NR-3001(第1図^(注13)1)、同亀井遺跡<南亀井町4丁目の調査>南側側溝(同図^(注14)3)、同久宝寺南遺跡<その2>HトレンチSD51(同図^(注15)2)、和泉市池上遺跡SJ242、奈良市四分遺跡SE760一括資料^(注17)、茨木市田能遺跡6Y調査区第2溝(同図^(注18)5)等より出土した資料がある。器形は、頸部が緩やかに外反することを特徴としており、発達した二次口縁を有する。体部最大径はほぼ中位に位置し、体部外面を丁寧にヘラ磨きするもので、A類は第V様式後半の土器群において既に安定した型式として定着していることがわかる。

大和、河内を中心に分布する二重口縁壺として完成された形態を持つA類壺とは別に、この時期の注目すべき壺形土器としては、広口壺に受け口状の短小な二次口縁を接合する形態にものが認められる(第2図)。その多くは第V様式後半のものであるが、その祖型となるのは第V様式前半に位置づけられる向日市中久世遺跡SD-6出土資料などであろう(第2図^(注19)2)。この資料は、直立気味の短い二次口縁、体部径に比して大きく扁平な底部、体部外面調整に弧が大きく不規則な波状文等を用いているなど、近江系受け口状口縁の壺の系譜を引くものと考えられる。この形態のものは、A類出現以後も後期後半~庄内式古段階にかけて、山城を中心に、丹波、大和、河内などに類例があり、在地の広口壺を祖型として近江系の影響をうけて複数の地域で出現したものとみられる。したがって、個体差



第2図 受口状口縁の壺形土器(注各文献から引用)

1. 越前塚遺跡 S X-17 2. 中久世遺跡 S D-6 3. 亀井(その2) S D-2304 4. 北金岐遺跡 S D-04
5. 中臣56次13号住居 6. 東土川遺跡自然流路 7. 中ノ田遺跡土壌 1

も大きく、過渡的型式として理解すべきものであり、二重口縁壺の出現の直接的な契機にはなり得ない^(注20)。類例として、八尾市亀井遺跡<その2> S D-2304(第2図3)、京都市中臣遺跡56次13号住居^(注22)、亀岡市北金岐遺跡 S D-04^(注23)、天理市平等坊岩室遺跡出土資料^(注24)などがあげられる。

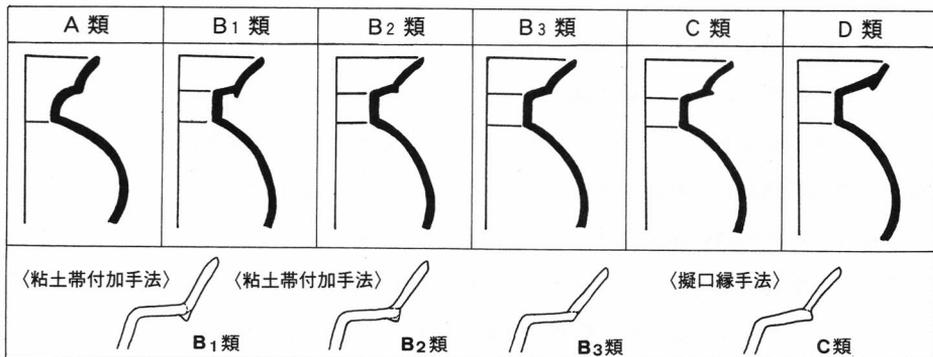
A類二重口縁壺は、共伴資料によって現状で最も古く位置づけられる唐古・鍵遺跡第45号竪穴などの資料が、既に外反する発達した二次口縁を形成しており、前述した受け口状口縁の広口壺の系譜上に段階的に発達してきたとみることはできない。これまでのところ、A類の初源的形態をとるものは、第V様式初頭～前半のうちに畿内および周辺地域においてもみとめられず、また大陸系土器との接点も明確にし得ないことより、畿内のなかで生成したとみるべきであろう。筆者は口縁部の有段化はかつて桐原健氏が提起した「高杯形土器の口縁部形態からの転化」とみることが最も妥当である^(注25)と考える。広口壺の有段口縁化によるA類の出現は、第V様式後葉において、墳墓あるいは祭儀空間での供献土器のセット関係をなす高杯形土器および器台形土器の口縁部形態に誘発されたものとして、第V様式後半における供献土器祭祀の発展と呼応するものと考えたい。

4. 畿内系二重口縁壺の型式

畿内第V様式後半に出現したA類二重口縁壺は、前述したように庄内式古段階までに畿内の周辺部にまで波及しているが、庄内式新段階には僅少となり、形式的には茶臼山式と呼ばれるB類壺が主流となっている。庄内式新段階は、このB類が、各地に拡散し、在地型式に影響を与え、新たな折衷型式を生み出すが、布留式最古段階には、B類二重口縁壺自体が他地域の土器型式の影響を受け、そのなかから新たに主流となるC類二重口縁壺を生成する。ここでは庄内式併行期から布留式にかけて展開した畿内系二重口縁壺の基本的型式について検討を加える。

各型式の消長に関しては、時期区分として、『矢部遺跡』編年における組成論を基準^(注26)とし、庄内河内形甕の型式変遷等の成果を援用することにする^(注27)。具体的には、庄内式最古段階、古段階、新段階に分け、布留式前半に最古段階と、古段階を設定する。各型式の対応関係は、庄内式最古段階—〈纏向1式、寺沢庄内0、1式、米田庄内I期〉、庄内式古段階—〈纏向2式、寺沢庄内2式、米田庄内II期〉、庄内式新段階—〈纏向3式前半、寺沢庄内3式、米田庄内III期〉、布留式最古段階—〈纏向3式後半、寺沢布留0式、米田庄内IV期^(注28)〉、布留式古段階—〈纏向4式、寺沢布留1式、米田庄内V期〉に対応するものとする。各段階において様相としてさらに詳細な検証が可能な場合には、古相、新相として補足することにする。

〈A類〉(以下、第3図参照) 前節で詳述しているので、簡単にまとめることとする。広口壺を祖型として第V様式後半に出現した最古型式の二重口縁壺で、頸部が緩やかに外反する短い一次口縁を有することを特徴とする。二次口縁は前述したように、高杯形土器あるいは器台形土器の口縁部形態と同じである。二次口縁との接合部下方に薄い粘土帯を付加するものが多く、さらに細分は可能である。無飾を基本とするが、庄内式最古段階の東大阪市馬場川遺跡土坑1出土資料では、加飾壺がみとめられる。二次的属性としてあげ



第3図 「畿内系」二重口縁壺の基本型式

ると、底部は平底で、体部内面はハケ調整される。

＜B類＞ 筒状の頸部をもつ二重口縁壺であり、従来、茶白山型式とよばれている形態のものである。茶白山型式には系譜的に異なる二つの型式が含まれているが、ここではそのうちの一つをB類とし、もう一方をC類として後述する。

B1類 まず水平及びやや斜め上方に立ち上がる一次口縁の端部上面に二次口縁を接合し、接合面を外側から丁寧にナデ消す。さらに一次口縁の端部下面に、断面三角形の若干の粘土帯を下方にむけて貼り付け、垂下させるものである。この手法を、便宜上「粘土帯付加手法」と呼称することにするが、前述した利根川分類では、a-2手法に該当する^(注29)。接合部下方に粘土帯を貼り付ける二次口縁の成形手法は、基本的に畿内第V様式後半の高杯の杯部の成形手法を踏襲している。しかしながら、口頸部の基本的形態は、第六節において詳述するように、第V様式の系譜上に位置づけられるものではない。加飾二重口縁壺の多くはこのB1類である。口縁形態以外の二次的屬性としては、体部内面を刷毛調整することを基本とし、口唇部内面を跳ね上げるものが多い。典型的なものとしては、奈良県箸墓古墳出土例^(注30)をあげることができ、粘土帯の突出度が小さいものでは奈良県桜井茶白山古墳に類例がある。

B2類 一次口縁と二次口縁の接合部外面の下方に、断面三角形の粘土帯が貼り足されており、B1類と同様、「粘土帯付加手法」がみられるが、突出度の小さい薄い粘土帯を貼り足している。接合部は、水平方向に開く一次口縁の上のせるように二次口縁を接合しており、二次口縁の基部外面には段が残り、明瞭な稜線をなすことを特徴とする。桜井茶白山古墳、京都府椿井大塚山古墳^(注31)、福岡県津古生掛古墳出土例^(注32)に類例をみる。

B3類 B1類と口縁部形態はほぼ同じであるが、「粘土帯付加手法」は見られず、一次口縁と二次口縁との接合面を外側から丁寧にヨコナデして消すものである。畿内系二重口縁壺の口縁部形態としては、遠隔地においてもみられる一般的なものである。

＜C類＞ 筒状頸部を有する茶白山型式のうちの、もう一つの型式である。水平方向にのびる一次口縁の小口端部(以下、擬口縁と呼ぶ)の上半に二次口縁を接合し、擬口縁下半を露出させるものである。B2類と形態的に類似したものが存在するが、B2類は擬口縁の側面上側に接合し、C類は小口に接合する。この手法は、中部瀬戸内地方および山陰地方の土器群の二次口縁の接合手法に類例がみられるが、二重口縁壺の手法としていち早くみられるのは四国東部地域である。この手法を以下、「擬口縁手法」と呼称する。利根川分類では、b手法に対応するものとみられる。体部は無飾を基本とし、内面にヘラ削りを施す点は、A、B類と大きく異なる属性であり、系統的に分別すべきものであることは明らかである。奈良県桜井茶白山古墳には、B類とともにC類が認められる。

<D類> 直立気味に立ち上がる頸部に、水平気味に開く受け部を有し、口縁端部を上下に拡張し、肥厚させたものである。東海系パレス壺の影響のもとに出現した型式であり、さらに細分が可能である。この型式に属するもののほとんどは、加飾二重口縁壺である。体部内面は刷毛調整を基本とする。類例として纏向遺跡辻・土坑4下層、大阪市加美遺跡14号墓などに類例がある。

畿内系二重口縁壺の主な型式としては、さらに細かく分類できる型式もあるが、基本的にA～Dまでの4タイプをあげることができる。

畿内系二重口縁壺A類は、第V様式後半に畿内の広い地域に安定した型式として存在しており、庄内式古段階にかけて二重口縁壺の基本的型式として盛行し、庄内式新段階には稀少な存在となる。頸部に明瞭な稜線を持たないA類に類似した壺は布留式古段階以降にもみられるため、この形態のものが存続するとする見方がある。しかしながらそれらは、二次口縁と一次口縁との接合部に着目すると、「擬口縁手法」によるものがほとんどであ

付表 各型式の消長

時期区分	「纏向」	寺沢 編年	米田 編年	型 式					
				A	B1	B2	B3	C	D
弥生後期後半				■					
庄 内 式	1 式 庄内式最古段階	庄内0	庄内I	■	■				
		庄内1							
	2 式 庄内式古段階	庄内2	庄内II	■	■				■
3 式前半 庄内式新段階	庄内3	庄内III	■	■	■	■		■	
布 留 式	3 式後半 布留式最古段階	布留0	庄内IV	■					■
	4 式 布留式古段階	布留1	庄内V 布留I		■	■	■	■	■
	5 式 布留式中段階(古)	布留2	布留II		■	■	■	■	
	— 布留式中段階(新)	布留3	布留III			■	■	■	
	— 布留式新段階(古)	布留4 (古)	布留IV			■	■	■	
	— 布留式新段階(新)	布留4 (新)	布留V						

り、頸部に稜線を持たない山陰系二重口縁壺の影響をうけたものと考えられるべきであろう。

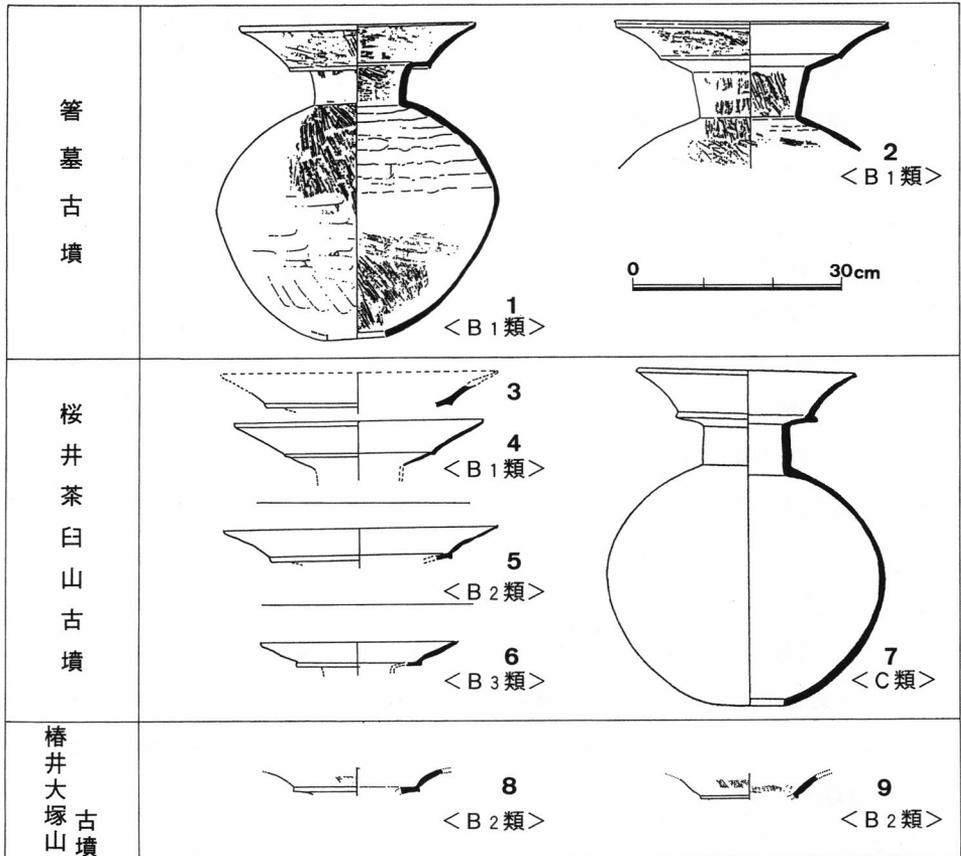
土器の地域間交流の最も盛んになる庄内新段階から布留式最古段階にかけては、茶白山式壺のなかでも、B類が主体的型式となる。B1類の出現は、庄内式最古段階の内にあり、庄内式新段階には加飾二重口縁壺の型式としても盛行しており、庄内式に特徴的な二重口縁壺である。一方、「粘土帯付加手法」の省略されるB3類は布留式古段階から中段階にかけて盛行する。近畿地方周辺部に分布するものは、主にB1類であるが、北部九州あるいは関東などの遠隔地に分布するものは主にB3類が展開している。こうした型式差は、畿内系二重口縁壺の波及した時期が、遠隔地においてやや遅れることが起因しているものとみられる。B類の模倣形態は北部九州から東北南部の各地に認められ、その分布は初期前方後円墳の分布域とも深く関係している。

C類は布留式古段階以降の畿内系二重口縁壺の主たる型式であり、布留式に典型的な型式である。後述するように、庄内式新段階に搬入された東部瀬戸内地域の壺形土器の影響を受け、出現したものとみられる。C類の特徴である「擬口縁手法」は、山陰系二重口縁壺にも採用され、山陰系が主たる位置を占める布留式中段階以後の二重口縁壺にはほとんどこの手法が採用されている。C類は、布留式中段階まで普遍的にみとめられるが、時期が下がるにつれ、口径が大きくなり、頸部内面の稜線が不明瞭な山陰系二重口縁壺に、形式的に集約される傾向があり、中段階以後は畿内における二重口縁壺の主型式は布留式を構成する山陰系が占めるようになる。

D類は口縁部を肥厚させるパレス壺の系譜上にある型式で、端部の形態はさらに細分できるものである。庄内式新段階～布留式最古段階に盛行する。B1類とともに、加飾二重口縁壺の中心型式となっており、近畿地方に限らず北部九州から関東までの広い地域にみられる。

5. 茶白山式二重口縁壺の型式

茶白山型式の二重口縁壺は、頸部の直立気味に立ち上がるB類とC類が基本的な形態であるが、前述したように、変遷上は「粘土帯付加手法」を基本とするB類が先行し、「擬口縁手法」により二次口縁を成形するC類が後出の型式である。茶白山形式の分類に関しては、従来より口唇部内面の跳ね上げや体部のプロポーションが注目され、おおまかな時間的序列は考察されたが、基本的な型式分類を示したものは無かった。その意味で型式の設定には至っていないが口縁部接合手法の二類型を提示し、系統的理解に何らかの可能性を与えるとした利根川氏の指摘は重要であり、^(注33)拙稿もまた細部は異なるがこれを追認する形で型式分類している。



第4図 茶臼山型式の比較(注2・30・31文献から引用)

前期大形前方後円墳から出土しているいわゆる茶臼山式壺を検討すると、第4図にあげたように、奈良県箸墓古墳はB1類のみ、同桜井茶臼山古墳はB類に加えて、C類を含んでいる。一方、京都府椿井大塚山古墳はB2類を基本としている。単体としての二重口縁壺の形態的特徴のみから古墳の編年上の位置付けを探ることは無理があるが、敢えてその可能性について言及すれば、箸墓古墳の場合、現在知られているものはいずれもB1類であり、庄内式新段階を中心とするものである。さらに椿井大塚山古墳の壺形土器はB2類が主体を占めており、布留式古段階に盛行するタイプである。福岡県津古生掛古墳出土資料などに比べて、ハケ調整などが粗く、厚手であり、より新しい様相を示している。一方、桜井茶臼山古墳の二重口縁壺は、複数の型式を含む。若干のB1類を含むが、二次口縁の接合部の粘土帯が薄く、下方への突出度が小さい退化傾向を示すものがあることや、C類を含むことより、布留式古段階の様相を呈している。これらの壺形土器については、口縁端部の短い立ち上がりの特徴から庄内式晩葉とし、箸墓古墳と同時期に位置づける見方

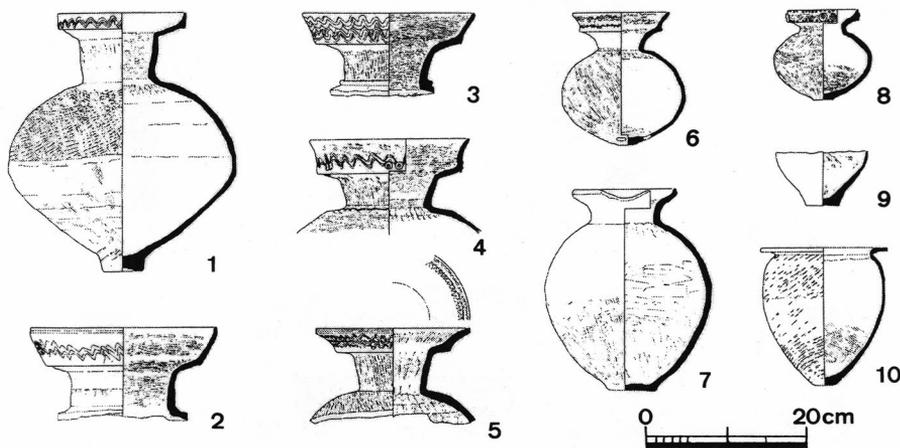
があるが、^(注34)二次口縁の接合形態には「擬口縁手法」によるC類を含んでおり、全体として型式的には新しいものである。

6. 茶臼山式二重口縁壺の系譜

茶臼山型式のB、C類二重口縁壺は、庄内式新段階～布留式古段階における各地への拡散性が高く、供献土器の畿内的要素の象徴として、前方後円墳の波及とともに注目される動きをなしており、その生成は、古墳時代初頭の社会的変動期にあって、社会的動勢と無関係ではない。

B類の系譜を考える上で、その特徴である直立気味に立ち上がる頸部の形態のみを重視した場合、第V様式後半以降の直口壺あるいは短頸壺から漸次的に派生してきたとする見方も可能である。しかし、それだけでは水平方向に屈曲して広がる受け部の特徴を説明することは難しい。B類の系譜を考える上で、注目すべき資料として、^(注35)神戸市深江北町遺跡の西群周溝内出土遺物がある(第5図)。

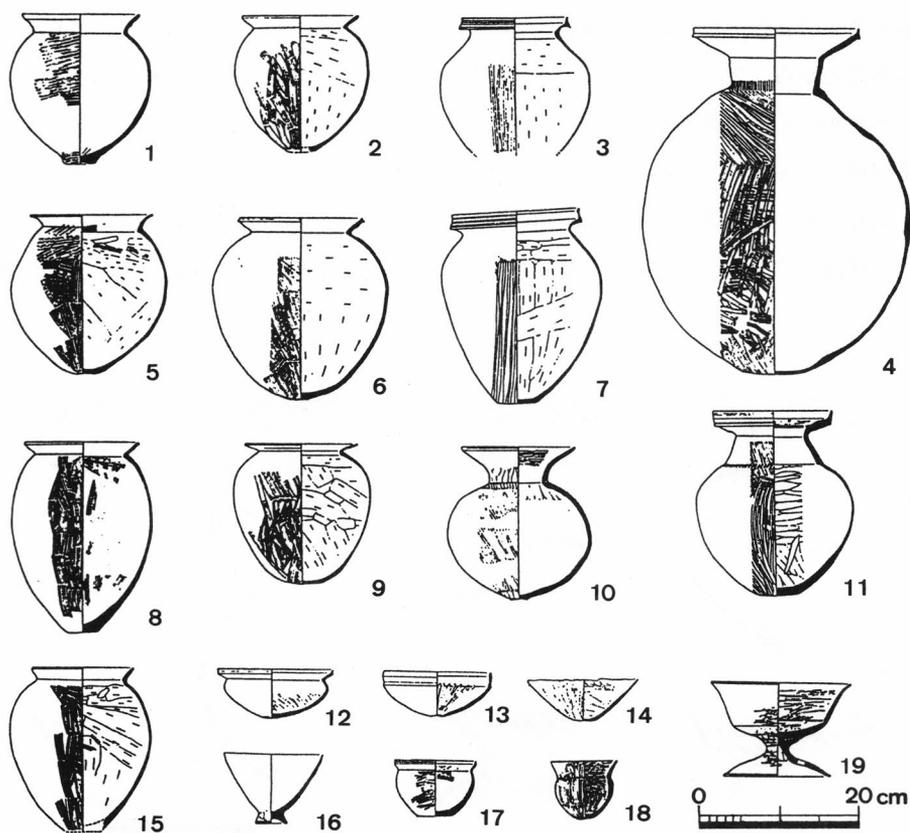
深江北町遺跡の資料は、方形周溝墓の周溝から出土したもので、庄内式併行期に帰属するものとして報告されている。甕形土器の底部が平底であり、三段階のタタキ成形を行っていることから、庄内式のなかでも古段階に属するものであろう。この資料のなかで注目すべき点がいくつかあるが、一つはB類二重口縁壺が型式的にほぼ完成された形で存在し、二重口縁壺の主たる型式となっていることである。口縁部の波状文は、庄内式新段階に河内、大和あるいは東海系の土器群にみる細かい山形文状のものとは異なり、孤が大きく不規則で精緻さに欠き、B類加飾二重口縁壺の古相を示すものとみられる。また、溝状遺構



第5図 深江北町遺跡西群周溝出土土器(注35文献から引用)

から共伴しているA類が小形の二重口縁壺であることに対し、B類には小形品がなく、推定器高35~40cmの大形品として定着しており、口頸部形態の相違が器体の大きさの別に反映している点が注目される。このことは、箸墓古墳などにおいて超大形二重口縁壺として出現するB類の系譜を考える上で重要である。

資料のなかで最も重視されるのは、報文中、二重口縁壺Eとされている第5図1の壺形土器の存在である。1は直立気味に立ち上がり、水平方向に屈曲する頸部に端部を上下に拡張して成形したものである^(注36)。この壺と類似した形態のものは、播磨・長越遺跡大溝出土資料にもあり、壺Cとされているが、直立気味に立ち上がり水平に伸びる口頸部の形態は、基本的に在地あるいは畿内周辺の第V様式後半にみられるタイプものではなく、外来的要素を在地の土器様式に取り込んだものであろう。こうした形態の壺形土器は、香川県群家原遺跡^(注37)、同川津中塚遺跡^(注38)、徳島県矢野遺跡^(注39)、同黒谷川郡頭遺跡等の讃岐から阿波にかけての四国東部地域の弥生後期後半から庄内式併行期の資料に類例をみることができる。おそらく、四国東部の土器様式の影響を受け、播磨で生産されたものであろう。この壺形土器

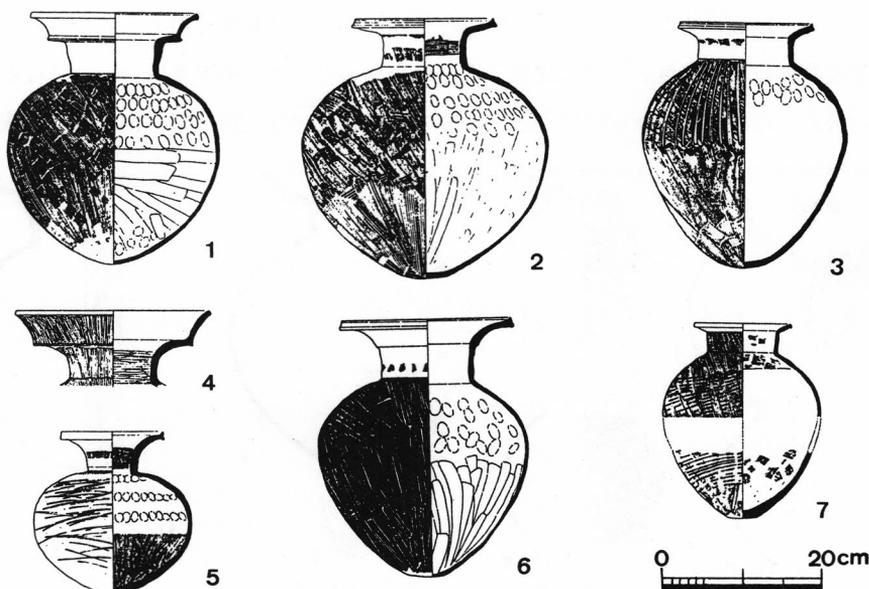


第6図 中田遺跡刑部土坑出土土器(注40文献から引用)

の直立的に立ち上がる頸部の特徴はB類の頸部の形態に類似するものであり、初期のB類二重口縁壺と共伴している意義は大きく、B類の出現あるいは定型化の背景に四国中・東部域の影響があることが推察される。したがって、B類二重口縁壺の生成及び定型化は、畿内系の土器型式と四国東部地域の土器型式の双方の影響を受ける播磨においてなされた可能性が高いといえる。

深江北町遺跡の壺形土器1に類する形態の資料は、河内地域の八尾市中田遺跡刑部土坑にも認められる^(注40)。中田遺跡刑部土坑は、一括資料に多くの吉備系土器群が含まれている(第6図)。この中には畿内系二重口縁壺は含まれていないが、大形器種として1点のみ含まれている壺形土器の口頸部の特徴は、前述した四国東部地域にその系譜を求められるものである。刑部土坑は、編年的には庄内式最古段階に位置づけられているもので、該期に四国東部系の大形壺が河内地域に流入していることは注目される。こうした資料からも、同時期に出現するB類二重口縁壺の系譜や庄内式新段階の箸墓古墳等にみられる超大形二重口縁壺の出現に、瀬戸内海沿岸の四国中・東部地域の土器群が何らかの影響を与えている可能性は高いといえる。

次にC類二重口縁壺の系譜の検討を行いたい。C類に特徴的な「擬口縁手法」が、庄内式の新相において最も安定した形で認められる地域は、山陰と吉備、四国東部域を含めた瀬戸内地域である。「擬口縁手法」は、布留期の山陰系壺形土器および甕形土器に通有の手法となっているが、当該地域の庄内式古段階併行期にこうした手法の系譜はみとめられ

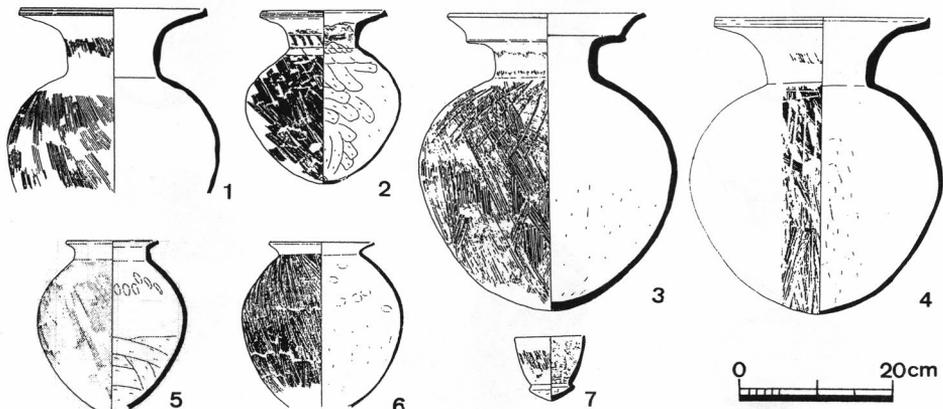


第7図 黒谷川郡頭遺跡出土土器(注42文献から引用)
1. 12号住居跡 2~7. 土坑1

ないため、中部瀬戸内系の手法が、庄内式新段階～布留式最古段階に山陰系土器群に影響を与えたものであろう。

「擬口縁手法」は、吉備地方では、庄内式古段階にあたる高橋編年Ⅸ期の壺形土器及び酒津式の甕形土器の口縁部の形態に先行形態がみとめられ^(注41)、庄内式新段階にあたるⅩ期の雄町遺跡や百間川遺跡では、この手法を用いた二重口縁壺がみとめられる。頸部が直立気味に立ち上がる典型的なB類壺であることより、従来は畿内系とみられていたようであるが、この型式の二重口縁壺は、庄内式新段階に併行するとみられる東阿波の黒谷川郡頭遺跡出土の壺に類例がある^(注42)（第7図1）。

「東阿波型」の組成をなすとされる二重口縁壺^(注43)は、筒状の頸部に「擬口縁手法」による二次口縁を有し、最大径が中位よりやや高くに位置する球形の体部であり、肩部に放射線状の暗文風ヘラミガキ、内面上半部に指頭圧痕、下半部にはヘラケズリを施すことを特徴としている。「擬口縁手法」は東阿波の在地的手法ではないことより、吉備地方の壺型土器の影響を受けたものであろう。庄内式の成立に際して、東部瀬戸内系土器群の影響は大きいとする米田敏幸氏の指摘があるように^(注44)、東阿波系の土器群は、単口縁の壺形土器や小形丸底壺の祖型となるとみられる小形鉢などとともに、二重口縁壺の搬入も河内を中心に散見される^(注45)（第8図3）。中田遺跡土坑2より出土している二重口縁壺は、結晶片岩を含むため、従来、紀伊系とされてきたものであるが^(注46)、口縁部および体部の形状や肩部の放射線状のヘラミガキなどは、明らかに東阿波の型式を踏襲するものである。結晶片岩は、徳島周辺の四国東部域の胎土中にも含まれることより^(注47)、東阿波地域より搬入されたものであろう。形式的に最も完成された東阿波型二重口縁壺を出土している黒谷川12号住居址資料は、黒谷川Ⅲ式、ほぼ庄内式新段階に併行するものとされており^(注47)、桜井茶白山古墳に代表され



第8図 搬入された四国系土器(注各文献から引用)

- | | | | |
|------------|------------|---------------|--------------|
| 1. 八尾南土坑50 | 2. 亀井北2号墓 | 3. 中田1丁目土坑2 | 4. 久宝寺南3号墓上層 |
| 5. 小阪合S D1 | 6. 萱振S E03 | 7. 美園D S K306 | |

るC類二重口縁壺(第4図7)の祖型と言えるものである。

7. おわりに

古墳時代初頭において、広範囲に拡散する畿内系二重口縁壺の型式として知られる茶臼山型式は、直立気味に立ち上がる頸部を特徴とする(B類)。その出現は庄内式最古段階にあり、弥生後期後半の畿内系二重口縁壺(A類)の系譜上に展開したとは考え難いものである。B類の型式的特徴は、四国中部から東部にかけて広範に展開している広口壺の口頸部形態に影響を受けたものであり、畿内系の土器型式と阿讃地域の土器型式の影響を受ける播磨地域において、茶臼山型式の初現的な形態が生み出されたのであろう。

さらに、茶臼山型式として従来一括して扱われてきた二重口縁壺は、二次口縁の接合手法により、二次口縁の接合部から下方へ粘土帯を垂下させる「粘土帯付加法」によるものと(B1、B2類)と、一次口縁の小口端部上端に二次口縁を接合し、擬口縁を形成する「擬口縁手法」によるもの(C類)の二系統がある。前者は第V様式後半以来の高杯の成形手法を踏襲するものだが、後者は体部内面をヘラケズリするなど、その属性は大きく異なる。

畿内系二重口縁壺の型式及びその系譜について検討してきたが、基本的には、第V様式系のA類→庄内式系のB1類→布留式系のC類という型式変化を遂げる。茶臼山型式の一方の型式であるC類は、布留式古段階以降、前期古墳に供献される畿内系二重口縁壺の基本的な型式であり、その祖型が四国東部地域にみられることは、堅穴式石室の導入や朱の流通の問題などとともに、古墳出現期における中、東部瀬戸内地域との社会的あるいは政治的情勢の変化とも関係するものであろう。

拙稿を草するにあたり、森浩一先生をはじめとして、辰巳和弘、寺沢薫、奥田尚、菅原康夫、米田敏幸、中島正の各氏よりご教示を得た。末筆ながら、記して、深謝いたします。

(ののぐち・ようこ＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 本来、古墳時代の地域区分に関して畿内という言葉を用いるべきではないが、これに代わる適切な言葉が見つからないため、「畿内」と表現することにする。

注2 上田宏範・中村春寿『桜井茶臼山古墳－附櫛山古墳－』奈良県教育委員会 1961

注3 森 浩一・伊達宗泰「土器」(『日本の考古学』V古墳時代下 河出書房) 1966

注4 寺沢薫「大和における古式土師器の細別試案」(『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所) 1986

注5 蒲原宏行「北部九州出土の畿内系二重口縁壺－その編年と系譜をめぐって－」(『古文化談叢』第20集・中 九州古文化研究会) 1989

- 注6 下膨れ胴部を有する壺が加飾二重口縁壺の古い様相である庄内併行期に盛行し、これが東奈良遺跡、垂水南遺跡などを擁する摂津地域周辺に多い傾向があるとすれば、山城を媒介として隣接する近江、ひいては東海地域とルート上結び付き、それらの地域的影響を受ける可能性は大いといえる。しかしながら、初期の加飾二重口縁壺が下膨れ体部を有する傾向が強いの、これがパレス壺に触発される形で出現するためと筆者は考えており、初期の二重口縁壺の特徴とはいえても、摂津、河内地域に限るものではなく、地域性を具現するところには至っていないのが実情であろう。
- 注7 田口一郎「二重口縁壺の系譜の検討」(『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会) 1981
- 注8 利根川章彦「二重口縁壺小考」上・下(『調査研究報告』第6・7号 埼玉県立埼玉資料館) 1993・1994
- 注9 比田井克仁「二重口縁壺の東国波及」(『古代』第100号 早稲田大学考古学会) 1995
- 注10 末永雅雄・小林行雄・藤岡健二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16集) 1943
- 注11 豊岡卓之「畿内第V様式暦年代の試み」上・下(『古代学研究』108・109 古代学研究会) 1985・1986
- 注12 藤田三郎「弥生時代の土坑について」(『田原本の歴史』第1号 田原本町教育委員会) 1983
- 注13 高島徹・広瀬雅信・畑暢子編『亀井』(財)大阪府文化財センター 1983
- 注14 近江俊秀ほか『亀井遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会 1989
- 注15 一瀬和夫・赤木克視編『久宝寺南(その2)』(財)大阪府文化財センター 1987
- 注16 井藤暁子ほか『池上遺跡』第2分冊・土器編 (財)大阪府文化財センター 1978
- 注17 木下正史編『飛鳥・藤原京発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所 1980
- 注18 福井英治他『田能遺跡発掘調査報告書』15 尼崎市教育委員会 1982
- 注19 木下保明・加納敬二「中久世遺跡」(『昭和58年度埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1985
- 注20 近江系の影響をうけた二重口縁壺としては、かつて豊岡卓之が初期の二重口縁壺として注11文献で提示した茨木市紅草山3号住居址出土資料があげられる。弥生後期後半の二重口縁壺のなかでは、二次口縁の形態や、加飾要素ともやや特殊なものである。肩部外面の櫛描直線文と櫛描刺突文から構成される装飾要素は、明らかに近江系あるいは東海系のものであり、初期の加飾二重口縁壺の出現に関して、近江を媒介にしたパレス壺を有する東海地域の影響を考えるうえで興味深い。
- 注21 広瀬和雄・石神幸子『亀井(その2)』(財)大阪府埋蔵文化財センター 1984
- 注22 平方幸雄・辻祐司『中臣遺跡発掘調査概報昭和57年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 注23 石井清司ほか『北金岐遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 注24 楠元哲夫編『岩室池古墳、平等坊・岩室遺跡』橿原考古学研究所、天理市教育委員会 1985
- 注25 桐原健「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」(『考古学研究』第15巻第1号 考古学研究会) 1968

- 注26 前掲注4参照。寺沢編年は、複数器種および形態の組成論として各段階の様相を明確にし、土器の型式的変遷を社会的関係性において捉えたという点において、優れた様式論だが、現実的に対峙する資料は、組成的に検討するに足るものばかりではなく、既存型式の複数の組成上の存在よりも、限られた器種の新出属性が一括資料の帰属時期を決める有力な根拠となる場合がある。近畿地方から遠隔地にある地域の併行関係の検討や、器種の限られた遺構の検討には特にその傾向が強い。寺沢編年は、組成的検討を主眼としたものである以上、同一器種の比較による形態差や調整手法に対する検証が不十分であるという点は否めず、各器種の型式学的検討が繰り返しなされ、その成果が反映されることによって修正され、発展されるべきものであろう。
- 注27 (1)米田敏幸「古墳時代前期の土器について」(『八尾南遺跡』 八尾市教育委員会) 1981
 (2)米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」(『考古学論集』1) 1985
 米田庄内Ⅲ期は布留式甕と共伴するものがある。このような場合、新出属性を有する甕の出現を重視して、布留式最古段階に含めることにする。
- 注28 寺沢氏は米田Ⅱ、Ⅲ期の甕B、Cは、僅少なから布留0式甕(米田布留系甕B、C)と共伴するものがあるとしている。
- 注29 前掲注8参照
- 注30 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」(『書陵部紀要』27 宮内庁書陵部) 1975
- 注31 近藤義郎ほか『京都府山城町椿井大塚山古墳』 京都府山城町教育委員会 1986
- 注32 宮田浩之『津古生掛遺跡Ⅱ』小郡市教育委員会 1988
- 注33 前掲注8参照
- 注34 置田雅昭「古式土師器研究—最初の布留式土器—」(『天理大学学報』第39巻第3号 天理大学学術研究会) 1988
- 注35 山下史朗編『深江北町遺跡』 兵庫県教育委員会 1988
- 注36 体部外面調整及びプロポーションは特に外来的要素を示すものではなく、胎土分析の結果も在地産とされている。
- 注37 山下平重・真鍋昌宏他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 群家原遺跡』第13冊 香川県教育委員会ほか 1993
- 注38 山下平重他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財報告 川津中塚遺跡』第14冊 香川県教育委員会ほか 1994
- 注39 徳島市教育委員会『矢野遺跡』 1991
- 注40 高木真光「中田遺跡刑部地区関西電力k k 地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」(『昭和53・54年度 埋蔵文化財発掘調査年報』 八尾市教育委員会) 1981
- 注41 高橋 護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』1 1988
- 注42 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会 1987
- 注43 前掲注42、菅原康夫「阿波弥生時代終末期社会の特質」(『考古学与生活文化』 同志社大学考古学シリーズV) 1992

注44 米田敏幸「土師器の編年」『古墳時代の研究』6 1991

注45 米田敏幸「中田1丁目39出土土器について」(『八尾市文化財紀要2』 八尾市教育委員会)
1986

注46 庄内式土器研究会の際、奥田尚氏よりご教示頂いた。

注47 前掲注42参照

補注 第2図7は、岡田 務ほか『尼崎市中ノ田遺跡Ⅲ』 尼崎市教育委員会 1991、同6は、國下
多美樹「東土川西遺跡の弥生土器—乙訓地域における第5様式—庄内式土器の変遷—」『研究
紀要』創刊号 向日市文化資料館 1986 より引用した。